

月刊

# いじろのとも

第四卷

六月号

## 愛情はボンド

愛情は  
ボンド

親と子を結びつ付ける  
ボンド

夫と妻を結び付ける  
ボンド

人と人を結び付ける  
ボンド

自分の中の  
自己と他己を結び付ける  
ボンド

## 二つの感謝

して頂いて  
ありがとう

させて頂いて  
ありがとう

# 生きがいを感じたい人は

## 五、言葉を通じて表現しよう。

人間の定義の一つとして、「人間はシンボルを操作する動物である」と言われています。つまり、動物の中で言葉を操ることが出来るのは、人間だけであるということです。でも、ついからです申しますが、だから人間の本質がそこにあると考えるのは間違いです。人間は、自分をおいて他者を思いやる事が出来るから人間なのです。そこを、くれぐれも間違わないで頂きたいと思えます。

さて、人間は、仏さま（あらゆる存在を超越したもの一般）と心を通わせる事が出来るようになるとき、最高の幸せや生きがいを感じることが出来ますが、そうならないうちは、人と心を通わせるのが最高の幸せです。これまで述べました、身振りや表情などの、身体的運動による非言語的な心の表出を通じて、人と心を通わせる事は出来ますが、やはり、ここで取り上げる言葉によるのが一番速く、的確に出来るように思えます。とくに、心の通い合わせでは最高のものである、思想と呼ばれるような、人間の生き方や考え方はそうです。

ですから、生きがいを感じるためには、自分の考えていることや、感じることを、出来るだけ多くの人に伝えていかなければなりません。そして、そこで理解を求めます。もし理解されなければ何故なのか反省し、自分を正していかなければなりません。

人は、そうした伝え合いや、理解のし合いが出来る人が多いほど、生きがいを感じることが出来ますし、また、人間的にも成長して行けます。

しかし、悲しいかな人間は宿業として多かれ少なかれ心に執らわれを持っていますし、また人それぞれの成長の度合いも違いますから、人と人が完全に理解し合うことは出来ません。多かれ少なかれ誤解し合っているわけです。ですから、どんなに深く理解し合っていると思っても、必ずいつかはそうでないことが分かります。自分が理解されることを他者に対して求めれば求めるほど、そうしたことを意識せざるを得ない時が来るのです。

つまり、人と人が理解し合うには限界があるということなのです。ですから、多くの人の理解を得ることは、生きがいを感じるもとはなりません。そうそう多く得られるものではない、ということなのです。また、本当に自分を理解してくれる人がいれば、たとえ一人だけでも、自分の心は満たされるものなのです。それが仏さま

ならば、最高です。

人と人が理解し合うことの意味や心理的メカニズムについて述べましたが、では、どのようにして言葉で自分を表現すればよいかを見てみたいと思います。

ご存じのように、言葉には二つの種類があります。一つは書き言葉、もう一つは話し言葉です。ですから、表現もこの二つを使った方法があります。

まず、書き言葉ですが、生き方や考え方のような思想や自分の情緒の美的な主張などは、殆どはこれによって行われ、世代から世代へと受け継がれて行きます。勿論、科学・技術のような知的な知識や技術もこれによりますが、ここでは、生きがいを感じるということですから、考慮の外に置いておきます。

書き言葉による表現には、具体的には、宗教や哲学などの思想、それから小説、詩、短歌、俳句などの文学があります。人と心を通わすためではありませんが、自分に語りかける日記も書き言葉による表現です。

哲学や宗教のような思想や小説となりますと難しいかも知れませんが、詩や短歌や俳句や日記は誰でも書くことが出来ます。

こうしたものを書くことは、人と心を通わせるためにとても大切ですが、それ以外にも効用があります。それ

は、自分自身を見つめることが出来る点です。自分の心をのぞき込む訓練になるといえます。それによって少しでも人間らしくなれるチャンスを得ることが出来るということなのです。

でも、それには条件がいります。それは、常に人間的に高まろうと志しているということです。そう念じているということなのです。そうでなければ、詩や短歌や俳句に、いくら上手に自己の感情を表現し、それが人に認められようと、人間的に高まることはありません。人に認められたことで、かえって、ますます傲慢になり、人間として墮落するだけなのです。それは、多くの著名な歌人や小説家をみれば明らかです。私も歌や詩の勉強のためには、そうした有名な作品を見てみることもありますが、そこに、その人たちの心の貧しさをみるにつけ、いやな思いをいただくことがあります。

人間は、文学に上手に自分の感情を表現するぐらいで、善い人間になることはありません。それは、一つの生き方の見本を人に提供することになるかも知れませんが、人がその文学を読んで善い人間になることがないのと同様に、書いた人自身も善い人間になることはないのです。のどが乾いたとき、冷たい水やビールを飲むようなもので、ほっとしますが、それによって人間的に高まること

がないのとそれほど変わらないことなのです。

大切なことは、自分が人間的に向上することを目指して、ひたすら修行することです。修行していることを自慢せず、かといって解脱に至らないことを卑下もせず、ひたすら修行し続けることです。そうしながら、自己を見つめるために、短歌や詩を書いてみることもなのです。そうしていれば、知らないうちによりものが書けます。

次に、言葉によるもう一つの表現の、話し言葉について見てみたいと思います。これには、演説や講演や講義や伝達のような一方的なものもありますが、ここでは最も一般的な心の通じ合いである、会話とか話し合いについて述べてみたいと思います。

集団には、特定の目的の遂行のために作られたもの、例えば会社とか、役所とか、学校とか、それ以外のいろいろな法人とか、と、自然的に発生する集団、例えば家族とか、親類とか、友人とか、近隣とか、の二つに大きく分けられます。

ここでいう会話や話し合いは、の集団でも大切ですが、何よりも大切なのは、の種類の集団においてです。この種の集団では、建前よりも本音で付き合うことが求められています。特に、近隣を除く家族や親類や友人関係ではそうです。そして、こうした集団の中で、人は自

分の心を安定させて、お互いが、最も深い相互的な人間的理解に達することが出来るように思われます。

家族のことについては、先月号の随筆欄に「家族は何のためにある」と題して書きました。話し合いや理解のし合いが、いかに大切であるかについて述べています。ご参照下さい。ここでは、友人関係に限って少しだけ述べてみたいと思います。

友人には様々な種類があると思います。常に接するのは、会社のようなの集団の中や、近隣の中で、特に人間的に親しくなった仲間です。家族に次いで、あるいは家族以上に、心から打ち解けて話し合うことの出来る関係だと言えます。

では、友人同志になるのは、心理的にはどんな意味を持っているのでしょうか。それは、どこかに共通性や類似性を持つ人同志が、お互いに理解し合うことを求めて付き合う関係だと言えます。前述のように、人間はどこかに執らわれを持っていきますから、完全に理解し合うことは不可能です。また、人間的成長のスピードは人ごとに異なっています。ですから、いずれどちらかが求めるものが得られない時がやってきます。つまり、理解し合えなくなるわけです。その時、別れがやってくるのです。でも、それまでは大いに語り合いたいものです。

## 自作詩短歌等選

### 主婦の社会進出

多くの  
主婦が  
社会に  
進出する

家庭を  
放棄して  
社会に  
進出する

自分の  
経済的富裕のために  
社会に  
進出する

### 死出の旅

死出の旅

片道きつぷと

言うけれど

一度行かずば

ならぬとこそえ

### この世は極楽

生かされて

生きる喜び

日々感ず

この世まことの

極楽浄土

自分の  
自己追求のために  
社会に  
進出する

子どもや

夫のためではなく

社会に

進出する

今や

日本の

家庭は

どこへ行くのか

まだ早い  
まだ早い  
もうすぐ  
もうすぐ  
もうすぐ

## 自作随筆選

### 総理の発言

先日、もう二、三カ月前のことでしょうか、宮沢総理が記者会見でいった言葉が気になって、忘れられません。多分、選挙制度についての発言だったのだと思うのです

が、自民党が提出する法案と野党が提出する法案について、記者から、自民党案を野党側に譲歩して、少しでも妥協できるところはして、解決に歩み出してはどうかと、総理の見解が問われた時、総理が言いました。「そういうのを、敗北主義と言うのだ」と。

私はこの言葉が、ひどく気になり、いまも頭のどこかに引っ掛かっていて、忘れられないのです。何故なのか、少し考えてみました。

まず、敗北主義の「敗北」という言葉ですが、それは、戦いの結果を表す言葉だと思つのです。つまり、勝利の反対語です。ですから、この言葉の裏には、政治は戦いであり、野党に妥協することは、その戦いに破れたことを意味する、ということだと思つのです。そこには、多数を占める政党が、数によって勝てば、少数者の意見を敗者のものとして無視してもよい、という態度があるように思えてなりません。

社会での行動を、勝ち負けに還元しようとする態度を社会ダーウィニズムというのだと思つのです。それは、「適者生存」、つまり生存競争という戦いに勝ち残ったものが適者として生き延びていく、それが人間を含めて生物の進化であるという考え方です。そして、この考え方には、そうして生き残って進化していくことが、この

世でもっとも価値の高いことであるという暗黙の了解が含まれています。

いま、世界中の現実の社会は、確かにそうなっているように思えます。国際社会は言うに及ばず、日本のように経済的に豊かな国でも、経済界は食うか食われるかの熾烈な生存競争を、国内だけではなくて世界中で繰り広げています。

そして、そこで相手を打ち負かし、経済的繁栄や経済的富を作り出すことが、人間の幸福や福祉をも生み出す、人間の最高の価値であるように考えられているように思えるのです。つまり、社会ダーウィニズムがそれを支える哲学的基礎となつているということなのです。

総理を通じて出てきた「敗北主義」という言葉の裏にはこうした哲学や考え方が横たわっているように思われるのです。

でも、政治が経済と同じ社会ダーウィニズムの原理で執行されていいのでしょうか。私には、そうした原理で政治までもが行われれば、終いには戦い、つまり戦争へと発展していくように思えるのです。日本の一国の総理がそうした危険な考え方であることに、非常な危惧の念を抱かざるを得ません。

政治は、皆が仲良く、幸福に暮らせることを目指さな

ければならないように思うのです。世界中の国々が取り違えてしているように、経済的な繁栄を追求することはその手段であつて、決して目的ではないように思うのです。ということとは、政治のためには、社会ダーウィニズムを否定して、他に哲学が求められなければならないことを意味しています。

私は、人間が人間らしく生きる哲学として、自己完成を目指してより善く生きるようと努力することと、社会的に他者のために役立とうとして努力することの二つをあげています。の目標は人間の一人一人の幸福・福祉を実現するものであり、の目標は人と仲良く生きることを実現するためのものです。人間はこの二つの目標の弁証法的統合の中を生きているのです。政治が、こうした哲学に基づいて行われる日の早く来ることを願ってやみません。

## スポーツの過熱

いま、アメリカを始め世界中がスポーツに過熱しています。日本もその例外ではありません。一つは、民衆のプロ・スポーツ観戦への熱狂、もう一つはアマ・スポーツの行き過ぎた追求です。

スポーツをしたり、見たりすることは楽しいものですし、また、適当にスポーツをすれば、健康にもよいことは誰でもが知っています。また、若い人が集団的なスポーツをすることで、社会性を身につけたり、個人的スポーツで忍耐力や気力や根性を養い、自己実現をして行ったりすることも、大切なスポーツの意義のように思われます。

こう考えますと、スポーツはよいことばかりで、スポーツを幾らしても、しすぎるということはなく、誰からも非難されることはない。こういった気持ちに多くの人たちがなつても、無理からぬことのように思われるのです。

でも、本当にそうなつていいのでしょうか。

私は、いまのスポーツのあり方は行き過ぎているように思ふのです。

例えば、アマチュア・スポーツの祭典であるオリンピックでは、勝つことだけが強調されています。国別に金メダルを幾つ取ったかが集計され、それが国威の発揚とばかりに世界に発表され、誇りにされます。こうして、四年に一度のオリンピックは、ナシヨナリズムのつぼと化すのです。また、かつては、主義の対立として、自由主義国と共産主義国との間のメダル獲得競争が華々し

く繰り広げられました。

このように、選手は国を背負って出場していますから、金メダルを期待される人の心理的負担は極めて重いものです。個人を超えて、メダルをとって国威を發揚することが皆から期待されているわけですから、たまりません。個人の楽しみや健康は二の次にされます。勿論、個人の自己実現もそこで果たされるわけですが、それよりもずっと国の力を誇示するという使命の方が、大きな意味を持つようになってしまっているのです。

こうした傾向は、何もオリンピックだけに限られませんが、高校野球のような高校生の全国大会でも同様の現象が見られます。彼らは、自分たちの楽しみや自己実現よりも、より多く郷土の期待を担っているのです。

ですから、郷土の人の期待に答えるためには、負けるわけにはいけません。勝負へのこだわりが強く出てきます。勝負はどちらかが勝てば、どちらかが負けます。自分のベストを尽くして試合に臨めば、勝っても負けても、それに執らわれるべきではないのです。

でも、多くの人は、やるからには勝たなければ意味がない、とばかりに勝負にこだわります。小学生や中学生でも、この傾向が見られます。夜、遅くまで練習して、勝つことだけが追求されます。勉強もせず、友達との交

流をも犠牲にし、親の手伝いもせず、自然にも親しまず、ひたすらスポーツだけが追求されます。

發達途上にある子どもや若者は、スポーツ以外にしなければならぬことが多くあるのです。そうしたものを全て投げ打ってスポーツをするということは、人間としていびつな發達をすることになると、私は思うのです。

スポーツはどこまでも楽しみや健康や自己実現のためにするものであることを忘れてはなりません。

もう一つの、見ることを楽しむプロ・スポーツについてですが、これも病的と言えるほど過熱しているように思えます。楽しみはどれほど追求しても、限りのないものです。スポーツは、どれほど楽しんで心も空虚さを満たしてくれるものではありません。ほどほどにしなればならないと思うのです。

隆盛な、プロ・スポーツをあげてみれば、国技の相撲、野球、ゴルフ、サッカー、テニス、バレーボール、ボクシング、レスリング、ボート、自動車やオートバイのレース、スキー、フィッシング、競輪、競馬、などなど多くあります。従って、こうしたスポーツに携わっている人気選手の所得額は、芸能人と同じように法外に高いものです。文化を創造していく学者の給料と比べてどれほど違うか、比較にならないほどです。異常な現象と



しか言いようがないように思えます。

経済が全てに優先する現代では、有名になって多くのお金を稼ぐことが、人間的に偉いという風潮があり、そのためにプロ・スポーツの選手になることを多くの子どもが夢見るようになっていきます。

何度も繰り返し返しますが、プロ・スポーツは見ることを楽しむためのものです。しかし、人間の楽しみを追求する欲求には限りがありません。ですからそれは、ほどほどにしなければならぬものなのです。

とくに、子どもたちにとっては、スポーツは豊かな人間性を育成させるためのものです。なのに、スポーツをすること自体を目的にすると、それは、人間性を損なう要因となってしまうように思えるのです。

現代人は、何が人間的なことなのか、分からなくなっ  
てしまっています。多くの人の目指すものは、いい学校  
へ行つて、いい会社へ就職し、たくさんのお金を稼いで、  
豊かな生活をする。もし、それが出来なければ、スポ  
ーツや芸能で有名になり、多くの所得を稼ぐこと。それ  
ぐらいではないかと思うのです。精進して人格を完成さ  
せ、自分自身の心の中に絶対的な幸福を築き、その幸福  
を基に、他人をも幸せにするように努力する。そういう  
ようなことは、殆ど問題にされていません。

子どもたちにとってスポーツは、こうした人格完成の  
手段に過ぎないのです。子どもへの指導にあたる人や親は、  
このことをよくよく、心しておかなければならないと思  
うのです。

### 金剛合掌の意味

密教では普段、よく金剛合掌をうみます。それは、普  
通の合掌の指先を互いに軽く組み合わせる合掌です。

この金剛合掌の密教上の意味は、右手を仏界、左手を  
衆生界として、両者が一体となることを表すところにあ  
ります。

でも、私はこれを発展させて、右手と左手の意味を私  
の心理学のモデルに結び付けてみました。

右手が他己、左手が自己を表し、各五本の指の間がな  
す間隔が四つの精神機能を表すとするのです。

ですから、手を合わせて拝むことは、自己と他己が弁  
証法的に統合されることを祈ることを意味することにな  
ります。

自己の根源は「絶対自己」ですし、他己の根源は「絶  
对他者」ですから、精神修養の最終段階ではこの二つが  
統合されて自分自身が絶対者になることを意味します。

# 釈尊のつとば（一一一）

法句経解説

（四七）花を摘（つ）むのに夢中になっている人を、死がさらって行くように、眠っている村を、洪水が押し流して行くように、

（四八）花を摘（つ）むのに夢中になっている人が、未だ望みを果たさないうちに、死神がかれを征服する。

先月号で、この世は泡沫（うたかた）のように、無常であることを解説しました。あの武将の信長でさえ、この世は「ゆめまぼろしの如し」と歌いながら、舞い、そして、その言葉の通りに死んで行きました。

まさしく人生は、百まで生きようが、百二十まで生きようが、信長のように若くして死のうが、「ゆめまぼろし」のようなものです。死はいつでも、誰にとつても、すぐそこに待ち受けているのです。若いから大丈夫ということはありません。若い人にも、不治の病気や災害や

交通事故が死の口を開けて、早くおいでと、年寄りと同様に、待ち受けているのです。大多数の人は、そんな死を他人ごとと思っただけですが、そんなことはないのです。あなたにも、あなたの連れ合いにも、あなたの子にも、あなたの親にも、あなたの兄弟にも、あすの死がすぐそこに待ち受けているのです。たとえ死の執行が、あすから多少伸びて百年後になろうが百二十年後になろうが、大した相違はありません。必ず死は訪れてきます。

この偈に歌っていますように、花を摘むのに夢中になり、まだ十分摘んだと満足しないうちに、信長もそうであつたように、死がもう訪れて来てしまうのです。

中国のある王さまは、自分の性欲も食欲も優越欲も、その他のあらゆる欲望を、満足させ得ましたが、自分の「命を永らえたい」という欲望だけは、満足させることが出来ませんでした。あらゆることでわがまま一杯であつただけに、この不満足に対するあがきようは、極めて異常でした。何百人も殉死させ、巨大な墓を作らせ、回りには多くの人形を埋めさせました。死後の淋しさをまぎらすためにそうせざるを得なかつたのでしょうか。

やっぱりこの王さまも、わがままを通しましたが、花を摘みおわたとは思えなかつたのです。あらゆる人に平等である、死の花は摘み得なかつたからです。

人間の欲望の花は無限です。決してこれでよいと満足することはありません。決して摘み終わったと思うことではないのです。人生の過程で多くの花を摘んだと思う人ほどが、最後の「いつまでも生き続けたいという欲望」の花を摘むことが出来ないのです。それまでの、自分の力で花が摘めたということに、執らわれてしまうからなのです。

でも、人間は有り難いことに、花を摘まなくても、そこらじゅうに花があふれ、この世こそが浄土である、と思えるように、誰でもがなれるのです。そうなりますと、もう死を恐れる必要はどこにもありません。これまでに何万年も、何百万年も生きた思いがして、自分の死をも客観的に見ることが出来るのです。

そうなるには、でも、先の王さまのように自分の欲望の花を摘むことにつつつをぬかしてはだめです。

自分の生きていく意味を見つめて、自分の名利や欲望の追求、つまりエゴの追求を抑え、他人を犠牲にするのではなくて、他人の犠牲にすらなつて奉仕し、常に「覚醒して」生きて行かなければならないのです。

もし、いつまでも自分の欲望の花を摘んでいますと、それは眠っているようなものなのです。その間に、死という「洪水が村ごと押し流してしまふ」のです。

(四九) 蜜蜂は(花の)色香を害(そこな)わずに、汁をとつて、花から飛び去る。聖者が、村に行くときは、そのようにせよ。

インドでは僧侶は働かないで、大衆からのお布施で命をつないで行きました。大衆も貧しかったのですが、僧侶の持ち物も三衣一鉢(さんえいっぱつ)だけで、極めて質素でした。暑い国ですから、着るものもあまりいりませんし、寝る場所も、どこかで野宿すればよかったですでしょう。また、インドでは僧侶にお布施するのは当然のこととされていましたし、大衆もお布施は自分の功德を積むことだと考えていたようです。信仰の厚い人は、差し上げる機会に巡り合えることを自分の幸運としていたのではないかと思います。中国や日本のように、「お布施する-される」という関係が、すぐに上下関係のようなものにはならないかかったのだと思います。

でも、このようなインドでも、托鉢で頂けないことも度々あったようです。何せ自分たちの食べるものもそう潤沢ではなかったのですから、仕方ありません。そういう時は、断食行と思つて一日食べずに過ごすのです。それが、花の色香をそこなわずに去ることなのです。

後記

一、六月三日（木）、井川町の同和教育推進協議会の総会で「相对比较と差別」と題して、講演をさせて頂きました。教育長を始め、協議会の会長さんや委員の方など、四十人ばかりの方が熱心に聞いて下さいました。講演の最後には、ヨーガの実演もさせて頂きました。一人でも多くの方が、毎日のヨーガに励まれ、幸せになつて頂けたらと祈っています。ありがとうございます。

二、講演の時間に先立ち、お相手をして下さった社会教育主事の方は、我が大学の卒業者であり、ある人から私のことを予め詳しく聞かれており、驚きました。また、私の書いた論文や「こころのとも」のコピーもノートに貼りつけて整理してあり、二度びっくりしました。この方も同和教育における「こころの教育」の大切さを説き、実践もされて来られたようで、私と共感するところがあつたからだそうです。なお、私の事をこの方に教え、わざわざ資料を差し上げて下さったのは、かつて、我が大学で私のゼミ生だった人で、県内で同じ社会教育主事をしている人でした。ありがとうございます。

三、先日、新聞の広告で『プレジデント』六月号の特集が、「禅のこころ 道元曰く、人は錬磨によりて仁となる。」であることを知り、これは面白そうと思い、買っ

てきて読んでみました。その特集記事の中の一つで「人は錬磨によりて仁となる」の「仁」の部分に仮名がふつてありました。それは「じん」ではなくて、「ひと」だったのです。私が面白いと思つたのは、私も、人間は修行することによつて孔子のいう仁に至れる、と言つて来たことに、この道元の言葉がぴったり一致していたからなのです。ところが、この記事の中で、ある仏教で有名な人は、これを「ひと」と読んでしまつていたので、驚いてしまいました。これでは、道元の言つていることが、とんでしまつていのです。もし、一般的にこの仁が「ひと」と読まれているとすれば、困つたことです。

月刊 こころのとも	平成五年六月八日
第四卷 六月号 (通巻 四十二号)	〒779 53 徳島県三好郡山城町国政八三四 ひびきのさと(清心者寺院) 心光寺 (沙門) 中塚 善成 <small>ぜんせい</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 清心者寺院 心光寺 口座番号 徳島9 53708	